

わがむらの昔ばなし

和尚さんと小僧

子供の時、寝物語に聞いた忘れられぬ、昔のものがたり

ずっと昔のことです。山の高い所に和尚さんと小僧三人が住んでいました。和尚さんは一人であまいものを食べようと、小僧が寝てから「うどんやそば」を一人で食べていました。小僧たちは寝たふりをして聞いており、「なんとか和尚さんの食べる時に起きて出て、一緒に食ってやるう。」と相談しました。翌日、和尚さんに「今度から小僧といつてもだれか判らんから名前をつけてください。」



「そうか何という名前にしようかの。」「私はガスガスとつけてください。」「妙な名だな、お前は。」「私はツルツルとつけてください。」「そうかい、ツルツルか三人目は。」「私はウマイウマイとつけてください。」「妙な名前ばかりだな ガスガス、ツルツル、ウマイウマイかまあええはそうしようー。」

その夜、小僧が寝たふりしている、和尚さんがうどんをゆでてかつを節をガスガスと削り始めました。そこで小僧は今だと思って「はい。」と言って出てきました。びっくりした和尚さんは「なんだお前は、今頃どうしたんじゃ、別呼びやあせんじゃったぞ。」

「いやあんまりツルツル言われるから私かと思っ出て来ました。」「ええ、困ったもんじゃなー今うどんを食べよるところだが、まあ仕方がないお前にも食わせるから、行儀よう食べんにやいけんぞ。」それから二人揃って食べました。

これを聞いた三番目の小僧も「はい。」と起きて来ました。「どうしたんじゃ。」

「ウマイウマイ、と呼んでじゃから和尚さんが呼んだと思っ出て来ました。」「いや呼びやあせんよ、今頃起きちゃいけんけど仕方がないわ、そんならお前も一杯食べいよ。」とうとう三人の小僧が、ガスガス、ツルツル、ウマイウマイ、とうどんを腹一杯食べたということでした。

今でもうどんを食べると、この昔ばなしを思い出し、今ではかつを節を、ガスガスと削らんなあと感じ無量である。

齊藤元宣

町民文芸

俳句

清風句会 (八月)

上田 雪子
風うけてはばたく如き芭蕉かな

宮垣 萬女
ほ、えみをくれたあの人走馬燈

沖村美智子
走馬燈亡き母我の胸照らす

山野タケ子
風に揺るかたつむり負ふ芭蕉の葉

仁保 民子
旅人や芭蕉の影にひと休み

藤木 常
寄る年にまた不整脈走馬燈

池田 久子
麻痺の手をささえて拜む芭蕉寺

齊藤 元
ケロイドの手にせる数珠や原爆忌

高崎はま子
万緑を橋に阿蘇の寝釈迦かな

選者 追吟
永田 石山
句座敷の庭にひろがる芭蕉かな

短歌

三隅短歌会 (八月)

安藤 芳江
柴山の谷川道を踏みゆけばぬれぬれ咲ける山百合の花

伊藤シズエ
対岸の仙崎港に夕の灯の彩深みゆく花火待つ間を

立間 雅子
悲惨なる戦の名残りがびつしりと珊瑚の覆える船姿映さる

久行 コト
堤防に刈り残されし紅カンナ炎暑の中にたぢろかぜ吹く

古屋 博子
夏ま昼のうぜんかつら咲き満ちて黒き揚羽は群がりて舞う

吉村 恵子
きりぎりすの声聞く夕バ秋立てり木立ちを通る風のすがしも

臼井 麻子
月光にほのかにうかぶ夕顔は香放ちてひと夜をもゆる

平川 喜敬
水遣れば木草のほめき去りゆきて朝ひとときのひややかな風



私のお母さん



中野由美子ちゃん(6歳) 生島